



連歌秘傳抄 宗祇
 歌用抄之詞 宗長

伊地知文庫
 文庫20
 182



文庫20
182



連歌秘傳抄
同用捨之詞

歌

秘傳抄

伊地知氏書冊



柳連音と云ハ歌の惣所三十二字也との如き
 是ハ佛乃三拾二相と云ふと云ハ三十一字小音也
 此を抄流と云ふ三拾二とおとれり此内或有耳
 分たり之句と云ふハ木火土金水也此内又
 仁義神智信の五常也別と云佛一代乃
 小字之小字也祝と云ふと云此音と云ふは
 連音と云ふと云ふ音ハ生佛ハ小音の依之是を

二、おまゝに連音の形は時を生佛一神の示す
仏生を死生おし相分ち多々必之此外連音の
功能扱を云々此美た厚くとも此抄は
おまゝに記志也連音の事と抄子人
不改佛道小多りとも此はこれなり
精速音の指倍ふくく末世の今も
此はとておまゝに抄子人

一、連音の年以るの神の事、音の事、六後の事

よりて速音の事、六神をぬふく、證を録す
阿まゝあり八神、十神、二指四神、四十一神、
十神をぬふく、此の教多しとも
八神を速音の肝要と得ん

一、平、四、同、詞、遠、心、對、埋、八、神、也

- 一、平とひく、心、つ、け、の、句、取、り
- 二、四とひく、心、は、古、の、事、取、り
- 三、同とひく、心、情、つ、け、の、事、取、り

四 詞とらふはも紫竹のむく

五 遠とらふはちの竹のむく

六 心とらふはこゝろの竹のむく

七 對とらふはお對竹の事と

八 堀とらふはしをれ竹の事と

一 平とらふは山と麓と浦と舟と竹と

なりしむもまじくもこの竹と竹と部と
りかへ向ふ

月の中をまはるやまは山端

志くも是も水も麓も舟も竹も 宗砌

一 四の竹とらふは竹の事と

毎ふとらふは竹の事と

友もたもたもたもたもたも

梅人の弓とらふ矢とらふ入山平侍と

一 風情とらふは竹の風情と

竹の風の情と竹の情と竹の情と

玉如と風情をいふ

金波の在年、又、いづら

又やうん有明の月は明後者付

一詞付と云はるるのたよりと云む小五合

和と云ふはつれと云ふ小糸解と付

一糸解と云ふ

昔海つとみれり情は終に

小糸解れむと付れ方の中終く

和

一遠有と云ふ喜小秋と付山小里と付小糸

今と付ると遠有と云ふや

む、心の山小人やまら

家ハ先、店少くきはほ

一むつけと云ふ喜合たり、以喜解情も

形、兵と云ふなり、まてつと情と云ふ

る、い、何れも、のちや

朝月、昔、秋の暮、小積り

一 お射射と云い田小島松小定はなと射く射を

いふ所

多れ射する妻は古もい

うち之は田小人のむらさ

一 埋射と云い少は射極まぬ句射きとも

唐年海文をさあうそ射をむと建射と

いふこ

溝り市祿小を浦う歩

松をき——は公の石は射はし田

うれ舟少浦の汐干射を極と射を建

ふい女早よ

世中と射ふ、あう一人射あう

溝り市祿の跡のあう形

は亭少くはうそと射射を

是は射う早や

一中若は此は射もつうと射く連射の

下ふとて...
 たし... 侍公...
 長河... 彰...
 何... 人...
 の...
 人...
 屋...
 宗...

下... 連...
 去...
 千世...
 一...
 切...
 之...
 下...
 下...
 下...

一才一為純粋りの事

ふれましよにふれまも捨て

山陰と秋のききふらぬまも

とくふくしとねがふん

つづつに今昔としねのぬき

初

きしよにふれまも捨て

山端れつらるる道ありまも

たふのふれまも捨て

まきしよにふれまも捨て

とくふくしとねがふん

つづつに今昔としねのぬき

このまきしよにふれまも捨て

句つけられしよに秋のしき

安ふれまも捨て

阿まの句はけふも捨て

希りの句もあつたの句も

冷合く竹をさきへし小蛇けきいほり
さりとりの形を

まわりのぬる所をかきし

旅をもいよほしむのむしを
侍云

そんねのひらうとま中

山をくくまのちゆうとまを
寺

あふをま年ちあふ

花はまはむしの人たあを
河

あやこよしのあま

本の本のちねんを
重

はれやすぬ浦のち人

雲深れ袖年言る月と
寺

此雲深れ句ふあにちありぬし

あふちの句あをぬりたのし

ももの句に切くあはれよ

あはれとまのし

しつとふとぬりつるんぬりふたふたふた
まじいれちを身をこにちちの行のた
はむかとも別物

おのよのひぬくはくぬき

家おしれ人の命もあぬ世平侍と

飛とりあたりそあちハ侍

くまきまこまこ初世の母のたふ 屋

とより人と思ひそめらん

家とさく誰もあぬあのみよ 初

山海と人のけつとそむ

おを捨や旅は月影をゆらおま 吉

こまぬのそそそ思ふおのれら

まのよまを繋りし人こぬ世よ 初

このふあひまきまつけらる平舟のよ

あひらひのけそあま

旅のちちよりあまあり

そらなつて

月うけの志し御そくはるに 松何

うらみのいそ秋よりん

花ちりく後と御禮系書形に 貴

いのでおきくはの世様ん

最とハる海ともは社塔しふ 御

着より外よりあまのれし

道阿もはの世すもさふた 竹

木束もくはのふあを

松社ハ花のと花とあひしに 松何

是うれちのけはふりこ

一境とるけりし ~~花~~ハ花のむく

志れをさきしはてけのしらん

けりいあのおれ詞とまのしとん

あふたしけり

山ふけのけり書れ明はる

いりけりおほるお月の海をん

うさぎの月をうらむ

面よりやちり松林とぬるぬる

庭前の松の枝をうらむ松林

山々松葉とよめる松林

善く舟乗りて園の松風

水々松葉のやうに松林

さうさうさう松の梢す

秋海も松は山とぬるぬる

人をもつて松林とぬるぬる

何故とせよ松林のさぬる

一 松林のさぬる

松林の松や形はさぬる

道々松林のさぬる

松林のさぬる

松林のさぬる

松林のさぬる

松

松

山のふれお紫と後秋の戸

如

ふゆの道やまゝあそび

ちき禮ハ紫系ハ世好のま

、目新 庭の毛を冬風のちき

つこの木とじと、のさり山

一 ~~と~~ 道や新紫はいじとれちそ

し

旗のころりそゆふと紫

月うれは秋とそそ秋も形

旗表くもそやまぬ

をらくれおふ、きらぬる年

君のつまず社阿ひとれ、

紅葉、のゆふ、たろみ字を

家ひ急くみほり

山はくちりまのち、くも

光のいのちれゆり、くほ

くさくさな女むし〜と云はし

一 くりともてけふ物^は是ともいふれちり

下ふとけり

うまかきこれい〜く別海

おしとぬいふふつけ〜と云はし

今物玉つあともきや面は

道ふも詞押りて明車はり

才天少ぬり 秋のよれ月

人ともいふ物もいふと云はし

一 くれともてけふ物^は是ともいふれちり

身物の〜と云はし

あふもい〜と云はし

世万に物戸ある物〜と云はし

仙人やうすくぬ年持橋をん

あ〜のき言〜と云はし

一 物と云はしの物の事は此句は〜

一 ~~水~~ 結やとあてなり結は二 結合をいふ也
いじりけさなるふもつうさるふも作志の思案よ
よして身~~二~~ ~~水~~ 也 ~~水~~ 結とも ~~水~~ 家の詞ふ
一切阿もぬと云ふ

沈もふさるも水のさる結の
阿ちまじと作れしる酒阿也
父母も水も佛しと阿れ
弟も亦も皆結の骨の性阿也

麻うちち〜 婦の結の意
月故小人結えしる若阿也
一 下志の ~~水~~ ちん ~~水~~ 事としたり又後と
まり ~~水~~ なる〜 他よりの ~~水~~ こと
魚

人ハかよとも身とばかり解ま
別はる款の〜 此のまがれ
阿ふが ~~水~~ ち〜 結阿也

ふりこぬわきぞ指針泊山

ふのやい申出のこ迷子丸

月の急折うくの海城歌舟

は下氣の何とぬさるふを先物れともまの

字とまはりむそ行るにゆく行ぬり一節

ぬくまをも能く切担の行々

一木をとらふふふにけりことめんうのこ

日公の社とそ二河さし

袖こそ林のこ海ふぬぬれ

まらぬもこうぬのくすも機控を

高し終お乃先たりぬれ

何くるまそ月のぬまの影をぬし

葉の戸ほそハ山ふこそ阿れ

ひととぬいこうも世やきても徳和

中は葉の敷とも終なれ

屋あれころまの枝さる葉朽て

是ハウんたるの丁をちまひともひら
ぬり

公のこ社勢終りしは終
ぬる誰をもれまら山極
本の中あり社権とハあ終
河のや沖形、の早社帆と
向りつるもれま公社すれ
母ふへき又ふ人の若をかて

花をこころ海をたれい社何れ
誰に社梅より風の匂あらん
屋一ぬいし人そ社何れ
山に社春の河たふ水せまて
流葉の氷の上ふれ何れ
夜川の入江の葉をさあさ
此れは一回公のこもや
一そこふてふまに社権とハあ終

たきくあをそぬし尚そ二月や、たきく
あをそいあそく紅ぬし物そふ、~~二年~~村
行形り

赤ん此月そ進く書ぬり
花ちれいほとくそなれ海茶

あてり夕一本の梅そ甘蓮花
老いづつ此公の毛いあ形そそ
おおよれ阿ふ叫そ村ら

まのぬのいりむ桂村松い離るく
是いれ松いしーくそそそ、~~廿~~村月そ茶て
ねそく出ぬらそいあるゆそ茶いほしぬそ
遠くそ竹きりり又そくそ一本桂梅そと松い
くふいそ路の毛い左形そそとあ、~~寺~~所
村白いれそふ松所そまや
しそそそそそそそそそそそそ
山そそそ、~~村~~村戸ほそふ口そ入

ほせをそ好ゆ萩とみねを
松をさき雪の山路の別り萩
海をさき雪の山路の別り萩
淀川の細川舟は移りゆく
一その下流は舟移りも松をさき雪を
水はさき雪を二まきく

別一人小坂をさき雪を
夢山行く海斗とさき雪を

巖をこりれは雪のさき雪
山下ふもむやう甲斐の海鳥
人吉松をぬ阿の金持也
我をすむ雪を雪の移りゆく
是るれ松をさき雪をさき雪を
あしをさき雪をさき雪を
松をさき雪をさき雪を

旅禊の月八欠ふもね

松とあつてつばしの風のそよぐ

こぼれとも程はいいちり

月やとら尾花の糸は林のあ

おねをきぬい冬色さ道

火ととん隣も所々草の店

そいつれなきて行かお竹のま

一とつていふふふなる幸さし物

とあ~~~~~とらとに~~~~~

あ~~~~~と人し神やおのこ

あつる月も今をい福さお中

お糸のつてもおふこお

花ちし福のさくよ若さあ

おの中ふも喜ん来おらり

あまのつら名もつ葉の毛はく

そいつれあ~~~~~と人し神

あ~~~~~とふふなる月もい

竹うら文おまの作とて 形 ま く い ふ い
一向此内の形と帯とく い れ と 花 ち り し と
子系 い れ し て 竹 あり よ い こ い れ ふ い こ い ら
形

杖も今も大物とて 形 ま く い ふ い
う杖あり い れ し て 竹 あり よ い こ い れ ふ い こ い ら
わ い れ し て 竹 あり よ い こ い れ ふ い こ い ら
公もも い れ し て 竹 あり よ い こ い れ ふ い こ い ら

二七 い れ し て 竹 あり よ い こ い れ ふ い こ い ら

清 い れ し て 竹 あり よ い こ い れ ふ い こ い ら

是 い れ し て 竹 あり よ い こ い れ ふ い こ い ら

一 比 ま く い ふ い こ い ら
い れ し て 竹 あり よ い こ い れ ふ い こ い ら

其 い れ し て 竹 あり よ い こ い れ ふ い こ い ら
い れ し て 竹 あり よ い こ い れ ふ い こ い ら

山のゆくふかすときも月なし

初しもまよひけむすり此

消ゆぬ身あしく空あたるらん

秋の暮る草の葉の初は

秋年系途を路とたるとん

気いそれいじとれちそけとる向所けり

霞あも人小阿たらぬ乃日

秋の暮る秋の山風音にて

のり秋の暮る秋の山風音にて

秋の暮る秋の山風音にて

入江の暮る秋の山風音にて

月あも人小阿たらぬ乃日

是の暮る秋の山風音にて

秋の暮る秋の山風音にて

秋の暮る秋の山風音にて

秋の暮る秋の山風音にて

秋の月小すね杜

くちの松や阿し

目いのもる秋の名所の山

小舞を分く松やゆはし

阿し松を字海も春をる

山路の松も秋松

あやの松と菊の里海の

此句はあやふも松をま

あやの松と菊の里海

松まの松と菊の里海

秋の名所の山と

あやの松と菊の里海

他

一又と云句小

又みゆり入相

山寺小

又袖好合流岸の葦川

あよきりまの中山越るそ

又やい山のおくふつん

月ハもやあきあき初はれ子規

むね—まな年又やうん

車とハ色—て今宵くわん

は句うれまよぢりいおのうのうとまよまの

晴とけつらいつ晴ふれりやうんといふと

う字や合結く又袖好—あま

あふ集りし附くあふあふの葦川を

袖と好くあつてく結り。

一~~~~~はあはあはあ

山、河、水、い、く、月、ハ、入、ぬ、れ

い、ま、あ、い、け、い、ま、の、境、路、の、留、原

田、つ、さ、う、れ、ハ、月、を、あ、ぬ、ら

さ、あ、ら、う、さ、あ、ら、い、山、の、林、の、水

ちりりたるはなれはなれはなれ

ちりりたるはなれはなれはなれ

一のこしよはなれはなれはなれ

物

柴きりつらり胡弓の音

波のくらくらの音をひたれは

音すのくれの道はひたれ

日そくぬ夕はなれはなれ

束つむむむの梅

えりり形はなれはなれ

一とよはなれはなれはなれ

ますはなれはなれはなれ

何はなれはなれはなれ

後をなれはなれはなれ

うき人のなれはなれはなれ

手と老りりと人を憐む

末をふ家の火の斗の木の友

古にふくしむるふまを

おろくのうしふ鳴る勢る勢

一福のいのちをはおせぬもの

たのひのちむる初末を

此里れちれち世より恒続を

隠れぬは家と恒続を

山にふくまきむるは花を

二六 隆里と初く同もや

公せよ花のこねの朝也

初覚を月の比ふなきもや

後さく志くれくはりれ林乃志

は向たのひのちむる初末を

能ちりしより恒続とけらふ初末を

くもまはく又隠れはひりしよすま

くもの初めはひりしよすま

一まゝにうらなはし分極し奉

まゝに初春のうらな田を極し

昔年のこぼれを末と極身に

まゝに木の本にうらな胡弓

まゝに山流の末を河に流す

まゝに流のまゝにまゝにうらな極身に

舟にまゝに極身にうらな松風

一たがといふまゝに分極し奉

系をうらな極身に奉

の里人姓入極身に極身に奉

まゝにうらな極身に奉

風流を山松の極身に奉

山流にうらな極身に奉

ちゝぬまにうらな極身に奉

はゝにうらな極身に奉

まゝにうらな極身に奉

ニ水くく竹より水鏡

一水くくくみそを竹縁

何ともや鳥の音もかきん

羨もせく遠くうつく目に見え

月に水く入ぬ縁の中

花の香に水くむく命を

一水くくく水く水く水く水く

水く水く水く水く水く

雲をく水く水く水く水く

水く水く水く水く水く

水く水く水く水く水く

水く水く水く水く水く

水く水く水く水く水く

一水く水く水く水く水く

水く水く水く水く水く

水く水く水く水く水く

何ぞ松の心小虫の取らん

春もあゝぬは世の末の松

一 ~~つ~~ ~~く~~ ~~と~~ ~~云~~ ~~て~~ ~~事~~ ~~は~~ ~~松~~ ~~く~~ ~~事~~ 心ニツ有

・ 母の何とれ山にゆく

松のきのよのこ 一 胡胡

あゝくも旅のうらみく

宿にむすも何や知の茶籠

旅の句小松の句 ~~うら~~ ~~ま~~

形あふらくも松の心小富毎や付

~~うら~~ ~~ま~~ ~~付~~ ~~け~~ ~~る~~ ~~事~~

一 ~~つ~~ ~~く~~ ~~と~~ ~~云~~ ~~て~~ ~~事~~ ~~は~~ ~~松~~ ~~く~~ ~~事~~

・ 母の何とれ山にゆく

松のきのよのこ 一 胡胡

一 ~~つ~~ ~~く~~ ~~と~~ ~~云~~ ~~て~~ ~~事~~ ~~は~~ ~~松~~ ~~く~~ ~~事~~

・ 母の何とれ山にゆく

松のきのよのこ 一 胡胡

いしつゝの書年ふくむるの

物とていふ所、うきも秋のま

一 中へいふとて、うきをいふは

中へいふとて、いふは

中へいふとて、いふは

結あけて社へ入りて

中へいふとて、いふは

一 つけいふとて、いふは

結あけて社へ入りて

中へいふとて、いふは

一 つけいふとて、いふは

結あけて社へ入りて

中へいふとて、いふは

一 つけいふとて、いふは

結あけて社へ入りて

中へいふとて、いふは

一 つれとよみ下ふとふしはなれしは

浦子いさくは連くは

うき娘の友は 海をこぎ

一 ごとくともよふとふしはなれしは

車のおとよみは 世ふはなれしは

山風の音は 舟田渡の里

一 まよふともよふとふしはなれしは

うき娘の友は 海をこぎ

月まら出り 杖のゆかり

一 ひとよとよみとふしはなれしは

まらまら 毎ふはなれしは

米なり 花は 志賀の山

一 ひとよとよみとふしはなれしは

のくらとよみとふしはなれしは

うき娘の友は 海をこぎ

一 ひとよとよみとふしはなれしは

こゝろも物たりかゝる

月よりこゝろもちりりも旅禱て

一たふをさうりともまて身候の事

結と書し心算の事

と候もあゝ今以後の事

あのみさうりも心算の中

山松もくけりも新なる事

一此もて云ふ事も身候の事

たれともさうりもあもたれ

一五千色候はま物と書し友

好ももやとも候高の事

此はもく夕山本の事

は汝もさうりもまは物と書し好も

心もさうりもまは物と書し好も

公河もさうりもまは物と書し好も

一甚若の字もさうりもまは物と書し好も

たもゆるふはき

きとちのまを祿する袂をく

山に水にこれ山下の物をお

とくれきささちの海を

家より人も持ちて舟舟

二世多ふけに年かき

いふにきん家よりかゝる老の皮

一とらねのまわと舟楫のまきもあせ

たもゆるふはき

うゝにきあまもれくしにき

松ののゆきよすむ孫の道

名もふくあ社隠家少佐の

茶の房は茶の戸海も山の後

たもゆるふはきあゝのま

はくしにきあゝのま

うゝにきあゝのま

埋木の事... 為紫の志... たりて

海洲衣袖... 衣はれたり

折り... 衣の事... 衣を

松... 衣の事... 衣を

月... 衣の事... 衣の事

河... 衣の事... 衣の事

衣... 衣の事... 衣の事

は句... 衣の事... 衣の事

人の... 衣の事... 衣の事

て... 衣の事... 衣の事

の... 衣の事... 衣の事

右... 衣の事... 衣の事

は抄... 衣の事... 衣の事

物... 衣の事... 衣の事

定紙 在判

三佐 在判

連歌秘傳抄

連歌道はまゝに習ふ中少くも教句并
照中三は秘訣を大事先照ハ之れ
習何り一は双照二は對一照之は遠照
あり是の秘多しハ双照と云
教句は相為しとす是照を對照
云ふ教句あり物と何事と對しと

水~~~~婦~~~~句~~~~は~~~~い~~~~び~~~~け~~~~を~~~~
と~~~~教~~~~句~~~~は~~~~公~~~~は~~~~あり~~~~遠~~~~を~~~~有~~~~く~~~~也~~~~も
行~~~~秋~~~~小~~~~お~~~~れ~~~~は~~~~也~~~~

一 双照の事

水~~~~廣~~~~一~~~~花~~~~内~~~~ま~~~~つ~~~~と~~~~や~~~~杜~~~~あ

た~~~~り~~~~た~~~~う~~~~ま~~~~一~~~~は~~~~地~~~~の~~~~遠~~~~也~~~~

か~~~~句~~~~は~~~~よ~~~~す~~~~る~~~~事~~~~と~~~~双~~~~照~~~~と~~~~し~~~~て~~~~之~~~~は~~~~ん
教~~~~句~~~~の~~~~公~~~~ハ~~~~水~~~~と~~~~公~~~~は~~~~あり~~~~れ~~~~は~~~~い~~~~り~~~~也~~~~も

花候つる春杜若とてしるを照るハ
け此ハハ松とてしるも蓮花とてしるを照る
と水之杜若とて候つてしるを照る
後句照神とて照るといふなり

一對之照の事

春もあつぬ小春の夜候川邊ハ
芝生とてしるの杜若候
是ハ春もあつぬとてしるを照る

對ハ小川 花を照る秋と對ハ
川邊とてしるを照る
照と對ハ照とてしるは詩ハ

春風 柳 雪 花 再日

秋 高松 桐葉 露時

此對する字を句とてしるを照る
詞能くえきて對ハ照とてしる

一遠照の事

雨の風ハ夕立指の如

すしき魔く高のひけ

是ち之照とてり。吾句ハ夕立のありて
何れと照ハ夕立のありて。高ハすしきを
神とてり。是ハ高初めハ高ハ高ハ
吾之一向吾句の句ハ高ハ高ハ高ハ
高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ
又高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ

かしもさじ。高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ
の秘し

一照ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ

一向高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ
すしき高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ
高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ
高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ
高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ
高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ高ハ

之を考覧の旨に示すなり

右に昭一流の相傳也

奥書

右に秘傳集志上代に先達奥義也
然皆中昔秘文流為詞園宗初法師
種々先達より妙訓之書記に代り
詞林述序に道之明之此抄
張家風之若詠之流為仁之尾初公

之附志中の傳受不知當知し知亦
不知之乎道之位不之附志今言之秘
密不知室替此方有者信書に傳
別とて述之種々象御書志仍此件

宗傳 在判

正佐 在判

用捨の詞事

- 一 うゝ、春の季つまりゆき毎夜はねりしは
- 一 けしきふかきくすむのあふそ何れか
- 一 又一句の煙もくはれ
- 一 うれあきし冷たくてはねりしは
- 一 橋本^舟も^花もねりしは
- 一 花のりしは
- 一 二月海生春は季つまりゆき毎夜はねりしは

但の依分神

一 高木之喜木之喜梅梅西那とらまて

一 高木之喜木之喜梅梅西那とらまて

一 初時西之孫とらまて

一 小石の山とらまて

一 一丁田の博けをいふとらまて

一 螢火の山とらまて

一 一丁田の博けをいふとらまて

一 福じかきとらまて

一 福じかきとらまて

一 一丁田の博けをいふとらまて

一 一丁田の博けをいふとらまて

一 一丁田の博けをいふとらまて

一 一丁田の博けをいふとらまて

一 一丁田の博けをいふとらまて

一 一丁田の博けをいふとらまて

一 うちき思ひにうき契うき心うき後うき訓れは
つまらぬうきあやうき

一 うきうき油も松も赤も以てうき

一 中集物所は好くうきうきうきうきうき

一 うき文句ふりうきうきうきうき

一 山室山物しし山雲水うきうき

一 山屋石屋松く山屋山物すうきうき

一 首水うき田水うき氷のうき首の木柱うき

うき

一 浪木塔かり塔波うきうき

一 海うきうき煙草うきうきうきうき

一 てはうきうきうきうきうきうき

うき

一 浦里をうきうきうきうきうき

一 世向ううきうきうきうきうき

うき

一河一舟に不意に他津に寄る

一舟人此舟は舟村の舟なり本より何れ河に

一舟人ハ近身板木板舟なり少くも此舟に不意に

一虹

一市人不意に舟村人舟に上りて不意に舟士

この舟に上りて舟村より舟の舟に上りて舟

一舟人舟に

一舟人舟に

一舟に舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

一舟の舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

一舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

一舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

一舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

一 初めは分りていゝ〜

一 まさ出〜の物何〜

一 鴨〜うききいぬま〜鴨のひ〜

解〜調のひ〜

一 鴨〜物〜但鴨おれ〜

〜鴨〜物〜ひ〜

物〜ま〜

一 板橋石等橋板と何〜

一 笠の〜

一 苔の〜

一 草の〜

一 油の〜油の〜油の上〜

〜床の〜

一 換人〜

一 雲衣〜

一 雲衣の〜

一 思出りて座も思ひて何のつく
 一 法の師也く好むまじき
 一 弓うけねたりしうき
 一 うきまきて白ふらうき
 一 焼火うけ梳火うきまじ
 一 うき煙ねりしうき煙いんそ
 一 夕の字きし何んしうきうき
 一 してまじき

一 形のみやうのひまじき
 一 けりる縁のあつたの事小毎夜よし一依句
 一 ありて何んしうきまじき
 一 以外何んしうき他中比字年の此らうき
 一 うきとハ意の詞まじきまじき
 一 いかまじき

一 上の句のをそふきてられまてとくハ中_{ちん}志
 の好士用られらう年の外も何んしうき

上ももろく手向れとて、幸多し
一句二句のあき

一 学ひ文の道、舟の道、花の道、
幸、その人、物、家、す、
屋、く、

一 古くは、か、ち、
く、

一 老らく、公、
く、

い、く、

一 旅の、
く、

一 や、さ、
く、

は、用、
く、

小僧紹也判

一、二、三、





